

## 異文化コミュニケーション

倉 田 稔

もくじ

はじめに

- 1 異文化コミュニケーション
- 2 ハプスブルク文化史を読み解くキーワード
- 3 ハプスブルク文化史ミゼレナス

はじめに

これは、初め 1 が異文化コミュニケーション小論である。後の2つは、こうである。小生は、ハプスブルク文化史を題材にして異文化コミュニケーションを描いた。それは、『ハプスブルク文化紀行』(NHK ブックス 2006年)であるが、そこに入りきらなかったうちのごく一部を、3として、ここに入れる。

### 1 異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションとは、近年使われてきた言葉であり、1つの学問であり、また大学でもその科目がある。だがこれは、世界史的な観点から見ると、かなり浅薄なイメージを与える。結論から言えば、異文化コミュニケーションの最大の要因は、戦争や征服にあったのである。現在この言葉がそれらの事変をさし示しているとは考えにくい。そういう意味で、この言葉は表面的な、お嬢様的な理解におちいらぬとは限らない。

ここで、重大論点をいくつか指摘しよう。

異文化コミュニケーションあるいは交流にとって、最大のきっかけは、他国の征服であり、それを実現する最も大きな要因は戦争である。世界史的に見てそうなのである。つまり他国を軍事的・政治的に征服して、それによって征服者の文化が他国へ流入する、あるいは押しつけるのである。

古典時代には、東洋が西洋を圧倒していた。ペルシャ・ギリシャ戦争では、ギリシャが勝ったが、ペルシャ帝国の存亡はゆるがされなかった。ペルシャが倒れるのは、王位継承の内紛であり、外的要因としては、アレクサンダー大王による征服である。アレクサンダー大王はギリシャ文化を世界に広めたかった。もちろんその動機は収奪である。

征服者の文化が高ければ、その文化は広まる。ただし、それは変形された形をとるであろう。征服者の文化が低ければ、その文化は広まらない。普通は前者の例が多い。

異文化コミュニケーションにとって、征服と戦争は決定的に重要な要因である。それ以外に、大きいのは宗教の伝搬である。ただし宗教といっても、それが拡がるには、同じく征服、戦争、貿易が、背後にある。宗教は1つの国家あるいは大領域が持っているものである。これが他国や他領域を征服するときは、その宗教を強制する。大航海時代のキリスト教はそれであった。宗教

は文化のもとであるが、搾取・収奪の露先払いでもある。一例として、スペイン・ハプスブルクは、南アメリカ大陸の文化を滅ぼした。宗教の伝搬では普通は文化交流は行なわれず、他国文化を滅ぼすことが先決であった。また、文化は富と権力によって創られる。そして征服のために文化が利用される。

もう1つ重要な点がある。文化と文明は違うのである。大野晋は定義する。文化はおカネで買えない物で、文明はおカネで買える物である、と。ここから重要な点がでてくる。文化は本来、異文化コミュニケーションという意味で、交流ができるのだろうか。この定義からは、本質的にはできない、と言える。

西欧では、主要な宗教は、紀元後ではキリスト教であり、宗教改革以後はカトリックとプロテスタントである。後者2つは激しい闘争をした。キリスト教とそれ以外の宗教も戦った。最大のものは、キリスト教対イスラーム教である。ついでキリスト教対ユダヤ教である。ユダヤ教はつねに弾圧された。カトリックはプロテスタントに対して、バロック文化を作った。

ジンギスカンの略奪は、文化交流がなかった。これは奴隷制を採用しなかったために、他民族を自分の国に編入しなかった。ジンギスカンは単に略奪・殺戮をした。

## 2 ハプスブルク文化史を読み解くキーワード

ハプスブルク帝国は多民族国家であった。オーストリアを中心に形成された国家が、ハンガリーやボヘミアを編入し、その後、スペイン王国を吸収した。その後、スペインを失うが、中東欧の帝国として君臨した。ハプスブルク帝国には、もともとのドイツ文化に加えて、ハンガリー、ボヘミアの文化と、ブルゴーニュ、スペイン、ネーデルラント、イタリアの文化が加わった。この中東欧の帝国はドナウ川を中心に広がり、そのためドナウ帝国とも言われた。そのドナウ川は全長4千キロで、オーストリアを出て西に、ハンガリー、ユーゴスラビア、ブルガリア、ルーマニアを通過して黒海に注ぐ。ドナウ帝国は11の民族を抱えた。スペイン式の宮廷行事、軍隊、ボヘミアやハンガリーの食事、音楽、これらが調和をもって融合した。こうして単なるドイツ文化にとどまらず、国際的に、あるいはコスモポリタニックになった。ハプスブルクの文化は、それゆえ多様で豊かになったのである。この中東欧の帝国、つまりスペインを失った時期の帝国は、マジャール人(=ハンガリア人)、チェコ人、スロヴァキア人、ポーランド人、イタリア人、西ルーマニア人、ブルガリア人、西ウクライナ人、クロアチア人、セルビア人を含んでいた。

ハプスブルクは、戦争によって勝利して領土を得、また敗北によって失った。結婚によっても領土を広げた。相手の国の継承者が戦没し、あるいは病死し、家系が絶えたからである。こうしていつも領土は変わった。

ハプスブルク・スペインは世界帝国として富と権力を持ち、ネーデルラントは商工業で栄え、こうしてハプスブルクは芸術文化を発達させる基礎を得たのである。その後、スペインを失うが、ハプスブルクは中東欧の帝国として君臨した。

さて、皇帝と国王は格が違う。ハプスブルク家は、少しの例外を除き、神聖ローマ帝国皇帝の座にあった。ヨーロッパ諸国の王から一人が選ばれて皇帝になるのであり、皇帝は一人しかいないのである。だからハプスブルク家は政治的歴史的に由緒あるわけである。そして、その広大な領地からあがる富で、文化を創り育てることができた。

宗教的には、ハプスブルク家は、宗教改革の際、神聖ローマ帝国の皇帝家として、既存のキリスト教の盟主になっていなければならなかった。精神の王・ローマ教皇と、世俗の皇帝・ハプス

ブルクは、キリスト教世界の兄弟なのである。それゆえハプスブルクは、プロテスタントに対してカトリックとして行動する宿命にあった。カトリックの文化は、バロックつまり反宗教改革の文化であり、こうしてハプスブルクはバロック文化の中心になる。バロックはプロテスタントからは冷淡視されたが、プロテスタント文化を圧倒するために、必死の努力を傾けたために、魅力的な文化をつくることになる。

ハプスブルク帝国の文化の第一、第二は、建築と音楽である。

レオポルト1世は作曲家だったし、後続の皇帝は音楽を保護し、発展させた。マリア・テレジアやヨーゼフ2世も音楽を愛好した。これらが音楽の都ウィーンを作った。モーツアルトの芸術はウィーンで開花し、ベートーベンはここで生活した。彼らの作ったドイツ音楽は現代世界で愛され、影響を与えている。ベートーベン是世界最大の作曲家とされ、コンサートで最も多く演奏され、また彼の生涯は、劇になり、映画になった。彼がもし故郷のボンに居続けたならば、その音楽はなりたたなかったであろう。ウィーンのオペラが世界中で愛される。多くの芸術家、文人、学者が登場し、芸術と学問を発達させた。フロイトは現代に多くの学問的刺激を与えている。

ウィーン市内のいたる所で目にする美術・建築も、ヴェルサイユ宮殿を除けば、ヨーロッパで最高の水準を極めた。文化の主流はバロックだった。ハプスブルクはそのキリスト教文化（特にバロック文化）を発展させた。現在ウィーンを訪れて、勤労者住宅やハース、フンデルト・ヴァッサーの作品を除けば、有名なものは皆、ハプスブルク時代のものである。オーストリアが、ウィーンが、またプラハ、ブタペストが、どれほどハプスブルクの遺産のもとにあるかが分かる。

スペイン式の宮廷行事、軍隊、ボヘミアやハンガリーの食事、音楽、これらが調和をもって融合した。こうして単なるドイツ文化にとどまらず、国際的に、あるいはコスモポリタンのになった。ハプスブルクの文化は、それゆえ多様で豊かになったのである。

ハプスブルクの政治支配は、多民族国家だったので、注意深く行なわれた。諸民族の融合政策である。これは民族をめぐる紛争に直面している現在でも、その解決の道筋を教えるかもしれない。ここでは民族問題が考え抜かれた。世界の多くの研究者は、ハプスブルクが多民族国家だったので、民族問題を、また中・東欧の言語を学びにやって来る。

ハプスブルクは、コスモポリタンのではあったが、多くの国と民族を含んでいたから、その文化は多様で豊かになった。つまり、初めは、ハンガリーやボヘミア、北イタリア、ユーゴなどを領有した。その後ネーデルランド、つまり今のベルギー、オランダを取った。次いでスペインを得た。このスペインは世界帝国になった。他方で、後にオランダを失い、またスペインを失うが、ハプスブルクはこうして世界的文化を採り入れた。これらの権力と富を文化に使った。そして文化もそれらに役立てられた。

ハプスブルク家は、第一次大戦のきっかけを作った。そして敗北し、約700年の歴史に幕を閉じるが、築き上げた文化、芸術、政治の流れは今も息づいている。そのかつての帝国領土にはハプスブルク文化が生きている。

近代に至って、ハプスブルク帝国では近代ブルジョアジーの発生が弱かったので、西のヨーロッパとは姿を違えていた。だから皇帝・貴族の文化の国であった。しかし1848年の3月革命で、近代資本主義が成立し、貴族から市民へと文化の担い手が代わってゆくのであった。ただしそれでも近代ブルジョアジーは王朝依存的であった。

近代ハプスブルク帝国は、大きく言って、チス・ライタニエンとトランス・ライタニエンとに分かれる。ライタ川を境に向こう側（＝トランス）が、ハンガリー王国である。こちら側（＝チ

ス)が、オーストリア側であり、チェコ、ガリチアをも含む。ハンガリー側は農業州であり、オーストリア側は産業が発達した。ハンガリーでは、豊かな第一次産品、農業生産物、食料や果樹、肉が生産され、オーストリア側では、第二次産業、特に繊維、装飾、手工業が発達し、経済財の文化を創った。これは帝国内分業であり、地方特産物が帝国内で流通した。ボヘミア・グラスやウイーンのポルツェラン（陶器）や織物が高名である。

ハプスブルク帝国にはユダヤ人が、比較的多く住んでいた。ユダヤ人は、後1世紀にローマ帝国の弾圧によって四散（ディアスポラ）して以来、千数百年間、国を失っていた。彼らの多くはポーランドとウクライナに住んでいた。それらの多くはハプスブルク領であった。これら東欧のユダヤ民族は、手工業者や職人や小商人であった。彼らは領主や農民にはなれず、社会の狭間にあって生活した。彼らは迫害された。異教徒であったし、イエス・キリストを殺した民族だとされたからである。近代には、その富がねたまれた。ユダヤ人の一部は徐々に西へ移ってきた。主にウイーンやプラハへであった。別の路を通してオランダにも多くユダヤ人がやってきた。ユダヤ人たちは生き残るべく、権力と妥協した。一部の人々は、質屋から大銀行家、大商人になりあがった。彼らの経済的努力は涙ぐましいものであった。異郷・異教の地で生きて行くためには、富か教育が必要だったのである。市民権を得て、土地の購入が許可されてからは、資本家になるユダヤ人が登場した。彼らはハプスブルクの政府に多額のカネを貸し付けたし、帝国の経済を支えた。その一方で彼らはその財力でハプスブルクの文化を支援した。そして、その子供たちは芸術と学問そのものに寄与した。つまり多くのユダヤ人が芸術家・学者になったのである。

ハプスブルク皇帝家は、多民族国家をまとめあげるため、ゆるやかな支配をし、特にマリア・テレジアやヨーゼフ2世の時代はそうであった。農民をひどく収奪しなかった。農民の営業も認めた。単なるドイツ国家としての政治にとどまらず、国際的でコスモポリタンの政治をおこなった。ハプスブルクでは仮借ない政治が行われなかったため、迫害の対象とされた少数者たちには寛容の地と思えた。特にヨーゼフ2世は信仰の自由を認めた。皇帝家は特に音楽好きであり、その統治の時代にこれを保護した。特にレオポルト1世は作曲もした。マリア・テレジアやヨーゼフ2世は熱心なパトロンであった。こうしてハプスブルク帝国はドイツ・クラシック音楽の故郷となり、それを今に伝える。

### 3 ハプスブルク文化史ミセレナス

#### 古いオーストリア

ハプスブルク帝国の舞台となったオーストリアでは、紀元前800年あるいは750年から400年までは、ハルシュタット文化として知られる初期鉄器時代である。ハルシュタットは現在のザルツカンマーグートにある。その後、紀元前400年からケルト人の文化がやってきた。紀元前279年からケルト人が侵入し、その一部族ノリキ族が、紀元前150年にオーストリアにおける最初の統一国家ノリクム（Noricum）王国を造った。しかし紀元前101年以来、この地に南方からローマ帝国がその支配の手を伸ばし始めた。紀元前15年には3つの属州ができ、紀元前10年にノリクム王国はローマの属州になった。紀元後10年には、ヴィンドボナ（現在のウィーン）がローマ帝国の軍団基地となった。だからウイーンでは現在でも、ローマ帝国時代の遺跡を辿ることができる。4世紀にゲルマン民族の移動が始まるにしたがって、ローマ人は徐々に後退した。476年に西ローマ帝国が没落し、488年にはローマ人の支配が終りを告げる。

500年以降はバイエルン族が侵入し、戦闘が交わされた。彼らはこの地に植民した。その後、ア

ヴァール人が支配した。バイエルン国はフランク国の従属に入り、フランク王国カロリナー王朝のカール大帝（742-814、在位 768-814）は、アヴァール族を滅ぼして、「オスト・マルク」（＝パンノニア・マルク）を建設し、東方異民族の侵入に備えた。その地理条件の良さから、ウィーンはフランク国の国境要塞になった。カール大帝の建設したオスト・マルクは、881年にウラル・アルタイのマジャール族（ハンガリー人）に侵入され、フランク帝国軍は破れた。マジャール族は前年にも大メーレン（モラヴィア）帝国を倒しており、907年に第二の戦いで、バイエルンの基幹軍もマジャール族に滅ぼされた。しかし、955年には、オットー大帝（＝1世）（912-73、皇帝在位 962-73）がレヒフェルトでマジャール軍に勝利し、オスト・マルクを再び建設した。オットー・マルクである。962年にオットー大帝は神聖ローマ帝国（正式には、ドイツ国民の神聖ローマ帝国）の皇帝となった。これ以降844年にわたって神聖ローマ帝国皇帝の称号が続くのである。この称号は、神聖ローマ帝国の終焉を迎えるまで、オーストリア史にとっては無視できないものとなる。

976年はオーストリア史にとっては重要な一里塚であった。ドイツ国王＝神聖ローマ帝国皇帝オットー2世は、レオポルト・フォン・バーベンベルク（LuitpoldまたはLeopold 1世）をオスト・マルクの辺境伯（Markgraf）に封じた。これ以降270年間、オーストリアはバーベンベルク家(2)の支配するところとなった。ドイツ民族のオーストリア支配が始まった。996年にオーストリアの地域は初めてオスタリッチ（Ostarrichi）と言われた。バーベンベルク家の王宮は徐々に東へ移り、ハインリヒ2世（ヤソミルゴットの別名をもつ皇帝）の時にウィーンに移った。宮廷は現在のアム・ホーフにあった。その領土はますます拡大していった。1156年、皇帝フリードリヒ1世（バルバロッサ）は、辺境伯領（Mark）を神聖ローマ帝国の内世襲の公領（Herzogtum）という特別の地位に引き上げた。この昇格を認めたのが小特許状（Privilegium Minus）である。この時期のバーベンベルクの領土は現在のニーダー・エステライヒにあたり、1192年にシュタイエルマルク公領を得、王朝最後のフリードリヒ2世はクラインの大部分を獲得した。

バーベンベルク帝国にとって問題は、法王と皇帝の争い、ベーメン（ボヘミア）やマジャール人（ハンガリー人）の脅威、そして十字軍であった。その当時のオーストリアは、（といっても現在のほぼ東半分の領土にすぎないが、）バーベンベルク家（976-1246）に支配されていた。

このバーベンベルク家の最後の君主・闘争公フリードリヒ2世は、1246年、ハンガリーとの交戦中に戦死し、後継がなかったので同家は断絶した。この年からオーストリアの空位時代が始まるのである。その後36年間は無政府と内乱の時代が続いた。ドイツでもちょうど皇帝のない時代、大空位時代（1256-73）であった。バーベンベルク領土の継承権をめぐる闘いの中で、ベーメン（ボヘミア）王となっていたプシェミスル・オットカル2世が、オーストリアに加えて、シュタイエルマルク、ケルンテン、クラインをあわせて領有した。

## （参考）

ウイルスン『神聖ローマ帝国』岩波書店。

Karl Lechner, Die Babenberger. Markgrafen und Herzoge von Oesterreich. 976-1246. Veröffentlichungen des Institut fuer oesterreichische Geschichtsforschung, Band XXIII, Wien, Verlag Herman Boehlaus Nachf. 1976.

## 初期ハプスブルクの歴史

皇帝ルードルフは1276年にウィーンに入城し、ここを同家の拠点とした。なお、ルードルフは音楽好きであった<sup>(1)</sup>。

ルードルフ1世時代、ボヘミア（ベーメン）軍は当時最強と言われていた。国王ルードルフは、ベーメンのプシェミスル・オットカル2世と衝突した。この年はオーストリア史の転換点でもあった。ルードルフは、ハプスブルク家領だけでなく、旧バーベンベルク家領も手中にしたのである。ベーメンの国家独立の権利はオットカルの敗北以来失われた。この戦いはオーストリア史で決定的な戦争であった。

ハプスブルク帝国の衰亡史を取り扱うとき、「帝国」をどう規定するかを述べる必要がある。現在の日本語が持つ「帝国」の概念には、次の二つがある。第一には、他国を支配領土に組み入れた国家、第二には、帝制国家である。ただし国語上は後者だけが規定される。だがここでは、「帝国」が他領域支配と君主制という二つの内容を持っているものとする。

ハプスブルク帝国の確立期について、およそ三つの説がある。一つは、世界帝国として領土的に広大な帝国となった時期、二つは、帝国が最強力になった時期、三つは、後年のオーストリア・ハンガリー帝国の前提としてその基礎が固まった時期、である。

フリートリヒ・シラーの戯曲で有名な「ウイリアム・テル」事件<sup>(2)</sup>の後、1291年8月1日、リュトリの誓いでスイスがハプスブルグから独立しようとした。ちなみに戯曲に出てくる悪代官ゲスラーはハプスブルクの代官である。これはアルブレヒト1世の時代である。

フリートリヒ3世が1452年に、ハプスブルク家として再び皇帝になり、5世を名乗った（在位1452-93）。ついでアルブレヒト2世の時代にハプスブルクはケルンテンとクラインを得た。

ルードルフ4世（建設公）の治世は短かったが、1363年には現在のアールベルクとチロルを入手した。そして1359年、偽作の皇帝特許状（Privilegium Magnus、大特許状）で宮中大公の資格を主張した。ルードルフ4世時代には、ウィーン大学（現在の建物ではない）の創設、聖シュテファン・ドームの大規模化などが行なわれた。だがこの時期にハプスブルク家は痛手を受けた。支配を拡大しようとした策が裏目となり、逆にスイスの旧家領を失ったのである。1315年から1388年の戦いで、スイス諸州は独立した。

1437年にドイツ国王となったアルブレヒト5世は、ルクセンブルク家最後の皇帝シギスムントの女婿であったので、同帝の死後1438年に、神聖ローマ帝国皇帝の称号をえた。再びハプスブルク家がこの称号を手中にしたのであった。アルブレヒト5世の後、帝位はレオポルト系のフリートリヒ4世に移った。彼は、1453年に大特許状を認め、オーストリアを公領から大公領に昇格させた。現在のオーストリアは、ベーメン（＝ボヘミア）とメーレン（＝モラヴィア）を除けば、この時期のハプスブルク帝国に相応している。

(1) 彼について、大原まゆみ『ハプスブルクの君主像』講談社。

(2) 後にロッシーニは、これをオペラ「ギョーム・テル」（＝「ウイリアム・テル」）にする。

## セルバンテス

スペインの文豪、そしてハプスブルク・スペインの時代に活躍したのが、セルバンテス（Cervantes、1547-1616）である。彼は『ドン・キホーテ』（正1605、続1616）で、中世の武士を愚弄した。しかし彼が真に批判したかったのは当時のスペインの政治であった。彼はスペイン最大の

文人となった。またセルバンテスは単なる作家ではなかった。広大に読み継がれる小説誕生の背景にはセルバンテスの波乱に富んだ小説さながらの半生がひそんでいる。

彼は、1571年の対トルコ戦争、つまりレパントの海戦（アドリア海）に、またオスマン・トルコ海軍との戦いに参加した。退役し、帰国する際、トルコの手で襲われ、つかまり、アルジェに送られ、奴隷にされた。身代金目的だった。そこで彼は何度も逃亡計画をたて失敗をくりかえすが、解放される。破天荒の人生体験は彼にすばらしい小説を書かさないではない。

セルバンテスは、1547年10月9日、アルカラ・デ・エナーレスで洗礼を受けた。父は外科医で、これは当時は低い地位であった。母は教養があった。男4人女3人の子を持った。その後、当時の首都バリャドリッドにゆき、その後首都になったマドリッドに1561年に移った。

彼は、マドリッドで僧の秘書となり、バチカンで、またその僧の下で勤めたが、軍人を志望し、スペイン軍隊に入る。当時は、トルコがキプロスを占領し、キリスト教世界が危機に陥っていた。1571年の対トルコ戦争、つまりレパントの海戦（アドリア海）に参加し、コリントス湾での攻撃で勇敢に闘うが、胸と左腕に戦傷を受け、これによって表彰された。

彼はメッシーナの病院で治療し、72年に退院すると、また軍隊に入って、対オスマン・トルコ海軍との戦いに参加した。74年末に退役し、ナポリで弟ロドリゴと会った。彼は故国スペインをすでに6年間も離れていた。マドリッドの両親は健在だった。75年9月末、1年の休暇を与えられ、兄弟でスペインに向かう船に乗ったが、4隻の軍団がトルコの手で襲われ、1575年9月26日、捕まった。弟と共に手足を鎖でつながれ、アルジェに送られ、奴隷にされた。1580年までの、5年間を結局彼は奴隷として送ったのだった。船長ダリ・マミが、セルバンテスを200エスクドで買い、弟は他の人に買われた。それは身代金を要求するためだった。彼は監獄へ入れられ、身代金の手紙を書けと要求されたが、拒否し、4カ月の鞭打ちに耐えた。普通100から200エスクドが身代金の相場であったが、彼の値段は500エスクドに跳ね上がった。母は30エスクドの援助金を国から引き出したが、足りず、両親は身代金を工面することができなかった。

そこで彼は第1回逃亡計画をたてる。逃亡を計った者は捕らえられて公開処刑が当然という時代だった。セルバンテスは綿密な逃亡計画を練り、それは6名で、オランまでゆくという計画だった。トルコ人の道案内人を雇って、逃亡をはじめた。しかし道案内人が彼らを置き去りにしてしまった。彼らは捉えられ、再び主人に地下牢へとじこめられた。トルコ将軍ハッサン・パシャがアルジェの統治者として赴任すると、セルバンテスは彼の召使＝奴隷になった。弟は身代金の交渉が成立して解放され、一足早くスペインへ帰国できた。

セルバンテスはスペイン人反乱計画をたてる。第2回目の逃亡計画である。弟がスペインで武装船を仕立てて、9月末にアルジェに送ることになった。セルバンテスは14人の仲間を、以前掘っていた洞窟にかくした。スペインからのその船が、キリスト教徒だと分かり、官憲に通報され、船は港から逃げ出した。元キリスト教徒でイスラームになっている男ハッサンが裏切ったのだ。彼は、脱走計画だ、首謀者はセルバンテスだと、パシャに密告して、逃亡計画が発覚し、一網打尽となった。セルバンテスは、その責任を一身に引き受けた。だが彼は拷問をうける。棒叩き2千回の刑が成り、それは事実上の撲殺だった。だが幸い助命嘆願者が現れた。それにより鎖につながれ、閉じ込められた。

今度は第3回目の計画をする。モーロ人を買収して、手紙を持たせた。これも発覚した。そしてまた助命が嘆願された。第4回目の計画は、1579年3月だった。元キリスト教徒と知り合い、商人の協力をえて、武装船を購入した。逃亡希望者が60名だった。だがドミニコ会士がこれを密

告した。セルバンテスが立派な人物であることへの嫉妬だった。また2千回の鞭打刑がきまったが、助命され、2重の鎖で監禁された。ハッサン・パシャは殺りく者だった。1580年9月19日、セルバンテスは身請けされた。修道士がハッサンと交渉し、身代金が半分送られて来たが、要求額の500ダカットには足りなかった。そこで仲間のスペインの奴隷たちは、死んだ者の身代金その他をかき集め、それによってセルバンテスは解放された。しかしその身代金は姉たちが払ったという説もある。

セルバンテスは自由になり、マドリッドへ帰るが、そこではレパントの英雄が見向きもされないのだった。弟はポルトガルへ軍人として行き、行方知れずとなった。セルバンテスは、恋愛し、女の子をこしらえた。彼の小説「ラ・ガラテア」の出版許可が1584年に出た。そして収税官になった。ついで、1604年、首都がバリャドリッドに戻ると彼も首都へ移った。アルマダの食糧調達吏になり、セビーリアに来た。資金に窮し、後に反古になる支払い証書を渡したりして、強制的に小麦を集めた。セルバンテスの給料も遅配であった。しかしアルマダはイギリスとの戦いに敗れて、彼はその職をクビになった。その後、収税吏になった。

『ドン・キホーテ』は、1605年に出版され、これによって後に彼は国民的英雄になる。1615年に後編がでた。やがてこれは世界の人々に愛される。1616年に死去した。

## 民族問題

近代チェコではドイツ語が公用語であった。チェコ語はチェコ人の間で話されたが、卑しい言葉とされた。ドイツ語が公用語であることは、社会経済生活で、ドイツ人にとっては有利である反面、チェコ人にとっては不利であった。役所ではチェコ人は採用されにくかった。ドイツ人と同じほど上手にドイツ語を話せるならば、同等であるが、そういう人は少ない。裁判でもドイツ語で行われるので、チェコ人は不利となった。学校でもドイツ語が教えられた。学校から帰ると子供たちはチェコ語を喋った。だがここで、チェコ語を公用語にせよという要求がもちあがった。これは民族意識高揚の当然の帰結であった。

多民族国家ハプスブルクの中で、新しい民族理論が創られてきた。筆頭はカール・レンナーである<sup>(1)</sup>。ハプスブルク帝国は多民族国家なので、帝国内諸国に民族自治を与えるとよい、とした。すなわち議会、行政、教育などの地方自治である。諸国にも種々の民族がいるので、その各州にもそれぞれ同様の措置をとるよう提案した。たとえば、下図のようである。

チェコ	ポーランド
オーストリア □ □ □	ハンガリー
イタリア ユーゴ	ルーマニア ブルガリア

たとえば、オーストリアはドイツ人の国だが、□には、チェコ人、ハンガリー人、イタリア人が住んでいる。彼らはいわば少数民族である。その地域には、言語、教育、宗教について、各民族による自治権を与えるというものであった。□の内部にもまた、亜少数民族が生活していることになる。そのかれらにもそれぞれの民族自治を与える。ただし行政体をつくれるほど大き

くないだろうから、特に宗教と民族性では各人が申告して、他地域の行政体・宗教体に各個所属させる。これは属人主義という。民族自治は普通は属地主義で行なわれ、考えられてきた。レンナーの解決法は新たな視点に立つものである。これをオーストリア社会民主党も考えていた。

オットー・バウアー (Bauer、1881-1938) は、『民族問題と社会民主主義』<sup>(2)</sup> で、民族問題、そしてそれを基にして新しい帝国主義論を展開した。彼は民族の定義を文化共同体とした。それに対してカウツキーは、言語共同体であると反論した。ただシカウツキーとバウアーは基本的には同じ立場に立っている<sup>(3)</sup>。バウアーは、諸民族の文化が独自に発展することを説いた。これは、世紀末にショックを与えた修正主義者エドアルト・ベルンシュタインの説に反応したものであり、ベルンシュタインは、帝国主義の文化作用を認めていた。一方、通常のマルクス主義の理解と異なる新しい考えであった。マルクス主義は民族文化の発展には否定的であった。当時の代表者カウツキーも国際文化を望んでいた。これら両者に対して、事実上反論したのである。後にバウアーは、オーストリア社会民主党左派の政治的指導者・理論家となる。オーストリア社会党は、ハプスブルク時代に、民族自治と民族文化を発展させるよう主張した<sup>(4)</sup>。

他方、社会民主党は、ハプスブルク多民族国家の中で、多くの民族の要望を取り上げねばならなかった。同党は民族自治を認めた。これは、民族文化の発展に肩入れすることであって、その民族文化とは、主に宗教と言語とがその内容であった。こうして社会民主党も文化に関心を払いながら、民族自治の解決策を探ろうとする。

(1) 「レンナー」(『民族問題』ナカニシヤ 1997年)

(2) そのうちの帝国主義論の部分だけ、訳がある。倉田訳、オットー・バウアー『帝国主義と多民族問題』成文社。この書の研究として、上条 勇『民族と民族問題の社会思想史』粹出版社。本書は全訳され、『民族問題と社会民主主義』御茶の水書房。

(3) 相田慎一『言語としての民族』御茶の水書房。

(4) 拙稿「オーストロ・マルクス主義」(『茨城大学政経学会雑誌』71号)

参考) 川村清夫『オーストリア・ボヘミア和協』中央公論事業出版。